

ディドロのブーシェ論

—『1759年のサロン評』から『1765年のサロン評』を中心に

胤森由梨 (大阪大学)

ディドロ (Denis Diderot 1713-1784) は友人グリムが主宰する『文藝通信』にサロンについての美術批評を書いた。サロン評の中で、ブーシェがディドロによって厳しく批判されていることは周知の事実である。しかし、ブーシェの作品の中でも一点のみ、高く評価された作品が存在することはあまり知られていない。そこで本発表は、ディドロが高く評価したブーシェの《キリスト降誕》(Nativité) (『1759年のサロン評』) を出発点に、ブーシェについての批評を確立した『1765年のサロン批評』までの批評の変遷をたどり、ディドロの思想を明らかにする。

ブーシェ (François Boucher 1703-1770) は、ルイ 15 世の愛妾である、ポンパドゥール夫人をパトロンに持ち、後にアカデミーの会長になった、ロココ時代を代表する人物である。ブーシェは優雅に着飾った男女の主題を得意とし、様々なジャンルの絵画を制作している。また、ブーシェの絵画は、社交界の人々に広く愛好され、藝術家にも大きな影響を与えたといわれている。

ディドロは『1759年のサロン評』の《キリスト降誕》において、聖母マリアと聖ヨハネの表情が大変美しく、良く描かれていると高く評価しているが、後年の 1761 年以降、ブーシェは厳しく批判されている。その原因は一体何にあるのだろうか。

ディドロのブーシェ評では絵画に関する様々な問題が取り扱われており、その問題は大きく二種類に分けられる。一つは絵画を制作する上での問題であり、二つ目は道徳に関する問題である。この二つの問題はディドロがブーシェ評を執筆する初期から構想されたのではなく、徐々に形成されていった。では、1759 年から 1765 年までの間にディドロはブーシェの作品のどの点に着目し、二つの問題を提起するに至ったのだろうか。

第一の制作上の問題については、ディドロはブーシェのサロン評の中で、年ごとに異なるトピックを論じている。たとえば、1761 年では、対象物がもたらす騒がしさが中心に論じられており、1763 年では、想像をもとに描かれる色彩について論じられている。1759 年では、対象物や色彩について語ってはいるものの、あまり明解にされてはいない。1765 年ではそれらをまとめて論じ、ディドロは、ブーシェが自然を観察せず、想像ばかりに頼って作品を制作する点に対し、激しく断罪する。第二の道徳に関する問題は、1761 年から 1765 年にわたって広く論じられており、二層構造をなしている。1761 年から 1763 年までは、ディドロはブーシェの絵画が鑑賞者にもたらす道徳的影響を示しており、1765 年では、ブーシェの品行が絵画にもたらす影響について論じている。

本発表は、ディドロの 1759 年から 1765 年までのサロン評に執筆されたブーシェ評をもとに、ディドロがなぜ《キリスト降誕》を高く評価し、他の作品は評価しなかったのか、その原因を絵画の制作上の問題と道徳に関する問題から明らかにする。